# わんりぃ

265 号
2021/7

日中文化交流市民サークル'わんりぃ'
町田市三輪緑山 2-18-19　寺西方
〒195-0055　☎：044-986-4195
http://wanli-san.com/
E メール:t_taizan@yahoo.co.jp

**シイタケの足切り**：台湾南投県の山間はシイタケ栽培が盛んだ。道路沿いに黒い遮光シートで囲まれたシイタケ農園が多い。作業場を覗くと年配婦人が「足切り」に大わらわだった。切った足は精進料理に使うそうだ。
（台湾南投県竹山鎮　20014 年 4 月撮影　佐々木健之）

'わんりぃ' 2021 年 7 月号の目次は 20 ページにあります

「寺子屋・四字成語」雑感-44

# 刻（kè）・舟（zhōu）・求（qiú）・剣（jiàn）

中国で見つけた“有名小学校入学準備の為の”絵本から

文と訳・有為楠君代（ういくす）

日本語では、訓読みにして「船を削りて剣を求む」とか言われますね。

・➢・➢・➢・➢・➢・

昔、楚の人が渡し船に乗っていました。船が川の真ん中辺に来た時、彼は誤って、宝剣を水の中に落としてしまいました。

船頭が慌てて言いました。「早く水に潜って宝剣を探しましょう。船をここに留めるように漕ぎますから」

するとその人は慌てずに、小刀を取り出して、船端に印を付けてから言いました：「慌てなくていいよ。剣が落ちた船端に印を付けたから、岸についてからこの下を探せば、剣はきっとみつかるさ。後でゆっくり捜そう」

挿絵：満柏画伯

船が岸に着いてから、その人は直ぐに水に潜って探しましたが、いくら探しても、剣は見つかりませんでした。

渡し船は、向こうの岸からこちらの岸まで絶え間なく進んで来ました。宝剣を落としたところから随分離れてこちら側に来ています。今頃になって、船の印の下を探しても宝剣が見つかる筈はありません。

・➢・➢・➢・➢・➢・

**言葉の意味**：こだわる、固執する。状況の変化によって事情が変わることを理解しない。

**使い方**：「船端に印を付けて後から探す」というのは、思い込んだことを変わらず信じることだ。

・➢・➢・➢・➢・➢・

このお話は、秦代に編纂された「慮氏春秋」に出てきます。趙の商人から秦の丞相にまで登りつめた呂不韋が、自身の食客 3000 人の中の著作を纏めたもので、道家や儒家を中心に当時の思想が網羅されており、先秦の思想を知るには格好の資料なのだそうです。

「春秋」には年齢とか歳月とかいう意味がありますし、孔子が「春秋」という歴史書を著し、それを注釈した「春秋左氏伝」など「春秋三伝」があるので、この「呂氏春秋」も歴史書だとばかり思っていました。実際は百科事典のような役割を果たす書物なのだそうです。今まで知らなかったとはお恥ずかしい限りですが、却って中国の書林の奥深さに、改めて魅力を感じます。

剣の落ちた処に印をつけておきさえすれば、後でその場所に潜って剣を取り戻せると考えるのは、落ちた場所という固定観念に縛られて、周りの状況、つまり船の動きを考慮していないから、愚かな行動だということになります。

しかしこれからAIだ、モバイルだ、クラウドだと技術が進むと、付いて行けない私が、この四字成語を教訓として、落としたその場所で剣を回収しようとするのは、状況判断が出来ない蒙昧な行為だと笑われることになるのでしょう。これからの技術に置いて行かれそうな人間には、状況にあった的確な行動をとるのは意外に難しくなりそうです。

ところで、このお話に登場するのは楚の人ですが、楚の人は他にも「蛇足」とか「矛盾」のお話に登場します。率直に言って、ちょっと馬鹿にされているような雰囲気を感じます。

楚は南に興った大国ですが、中原の国々から見ると文化程度が低いとみなされるのでしょうか。四字成語の世界では、楚の人は随分軽く扱われているようです。

日译诗词［漢詩の日本語訳］（14）

# 『敦煌曲子詞』（〈詞〉の始まり）

桜美林大学名誉教授　植田渥雄

〈詞〉は、詩とは異なる別の文芸様式として唐代に始まり宋代以降大流行し現在に至っていますが、その原初の形を残したものが 20 世紀の初め、敦煌莫高窟から発見され話題を呼びました。

初唐から盛唐にかけて、唐王朝の版図は一段と拡大し、それに伴ってシルクロードによる東西交流も盛んになり、多様な文化が中国本土に入ってきました。唐の都長安には、王侯貴族や高級官僚たちに娯楽を提供する花柳界が栄え、戯劇や舞踊など種々雑多な芸能が発達しました。その中には、それまでには見られなかった新しい曲調の音楽がありました。花柳界の女性たちはこれらの曲に思い思いの歌詞を充てはめて西方伝来の楽器に合わせて歌い、彼らを楽しませていました。

今回はその中の一首を取りあげてみましょう。なお題名となっている「望江南」というのは楽曲の名称であって歌詞の内容とは関係ありません。

〔原詩〕

wàng jiāng nán　wú míng shì
望 江 南　无 名 氏

tiān shàng yuè
天 上 月
yáo wàng sì yì tuán yín
遥 望 似 一 团 银
yè jiǔ gēng lán fēng jiàn jǐn
夜 久 更 阑 风 渐 紧
wèi nú chuī sàn yuè biān yún
爲 奴 吹 散 月 边 云
zhào jiàn fù xīn rén
照 见 负 心 人

〔和訳〕　夜空にかかるお月さま
まぁるい銀の鏡のようね
夜更けにつれて募る風
邪魔な群雲吹き飛ばし
憎いあの人映しておくれ

もう一つ、中には次のような、自らの境遇を嘆く歌もありました。これは恐らく彼女たちの本音を綴った一作と思われます。

〔原詩〕

wàng jiāng nán　wú míng shì
望 江 南　无 名 氏

mò pān wǒ
莫 攀 我
pān wǒ tài xīn piān
攀 我 太 心 偏
wǒ shì qǔ jiāng lín chí liǔ
我 是 曲 江 临 池 柳
zhě rén zhé wǒ nà rén pān
者 人 折 我 那 人 攀
ēn ài yì shí jiān
恩 爱 一 时 间

〔和訳〕　私に縋るの止しとくれ
心賤しい人ばかり
私は曲江岸辺の柳
折られ縋られ弄ばれて
情愛はほんの一夜だけ

これらの曲に充てはめた歌詞を〈曲子詞〉といいます。後に王侯貴族や高級文人たちも、妓女たちの求めに応じて歌詞を作るようになります。これが〈詞〉の始まりです。〈詞〉を作ることを〈填詞〉ともいいますが、これは「歌詞を曲に充てはめる」という意味です。また、これを〈詩余〉ともいいます。同じ韻文であっても〈詞〉は詩よりも一段下等なものとして扱われ、文人の余技の域を出ませんでしたが、歌詞の表現には詩では表せない味わい深いものがあります。明代以降、曲は失われていきますが、あたかも日本の和歌や俳句のように、多くの人に愛好されてきました。

# 李白の『春思』

報告：花岡風子

今回のお題は李白の『春思』という古詩でした。『唐詩選』に入っていないので、日本ではあまり知られていませんが、『唐詩三百首』には入っており、中国人なら小学生でも暗記しているそうです。絶句を得意とする李白が楽府のスタイルを真似て作った作品で、内容も少し系統の違う感じになっていますが、これも李白の得意分野の一つです。

当時、唐の都では、閨怨詩（けいえんし）や辺塞詩（へんさいし）が流行していましたので、李白もその流れに沿って、愛する夫や恋人を辺地の戦いに駆り出された女性の気持ちになって書いたようです。

では、早速内容を見てみましょう。

**燕草碧糸の如く、**（えんそうへきし）
**秦桑緑枝に低る。**（しんそうりょくし　た）

燕（えん）とは今の北京の辺りを指す地名で、戦国時代には燕という強国がありました。今でも北京のことを燕京と呼ぶことがあります。しかし唐の時代は辺境の地でした。燕の地に生える草は緑の糸のように細く、春はまだ浅い。秦は今の陝西省一帯、唐の都長安付近を指します。これも戦国時代、秦の国があった所なので、後世でもこのように呼ばれることがあります。都では桑の葉が鬱蒼と生い茂り、枝を低く垂らしている。「碧」と「緑」は同じく青々とした草木の色を表していますが、一方は北方辺地の遅く訪れる春、もう一方は都付近の早くやって来た春を表し、両者が遠くかけ離れていることを暗示しています。

**当に君の帰るを懐（まさ　おも）う日は、**
**是れ妾（こ　しょう）の断腸の時なるべし**

「あなたが私のところに帰りたいと思っている時には、私はもう耐えられない想いで待っているのよ」という、夫や恋人を待つ女性の気持ちを強調した表現です。「妾（しょう）」は女性の卑称。「断腸の思いとは、大袈裟ではないか？」という男性陣からの声もありましたが、女性の私から言えば、そう大袈裟ではない気もします。一般的に女性は男性の何倍も相手のことを考えているものですから。男性の方が、寂しくなる頃には女性の方は想いが募りすぎて耐えられない状態なのは、よくあることではないでしょうか。文革で生き別れになった夫婦を描いた「妻への旅路」という映画がありますが、夫を待ちすぎた妻は心労のあまり夫の記憶だけを失ってしまう、というストーリーです。「断腸」というのは、子供と引き離された母猿の腹を割いてみたら、腸がちぎれていたという話から来たと言われていますので、「母子の情に比べれば…」というご意見ももっともかもしれませんが…。ちなみに中医学では、腸は人間の精神状態に影響すると考えられています。中国語で「好心腸」とは「気立ての優しいこと」をいう言葉です。腸が健康であると気持ちも優しくなる、逆に腸が汚れていたら、イライラするので、人当たりが悪くなるという理屈は体感を以って納得できるように感じます。

**春風相知らず**（しゅんぷうあい）
**何事か羅幃に入る**（なにごと　らい）

ここは、擬人法を用いて女性が春風に話しかけるセリフのように表現しています。「春風（はるかぜ）さん、縁もゆかりも無いあなたが私の寝室に忍び込んでくるとは、一体どういうこと？」私が待っている

のはあなたではないの。私の夫なのよ、というわけです。羅幃（らい）とは薄絹の帳（とばり）。寝所と居間を仕切るカーテンのことです。「ユーモラスな表現になっていますね。李白は時々こういう茶目っけたっぷりの面白い詩を書いています」と植田先生。

全文は次のようになっています。

chūn sī lǐ bái
春 思 李 白

yān cǎo rú bì sī
燕 草 如 碧 丝
qín sāng dī lǜ zhī
秦 桑 低 绿 枝
dāng jūn huái guī rì
当 君 怀 归 日
shì qiè duàn cháng shí
是 妾 断 肠 时
chūn fēng bù xiāng shí
春 风 不 相 识
hé shì rù luó wéi
何 事 入 罗 帏

さて、李白は自作の詩の中に「春」という字をたくさん詠み込んでいるそうです。春から連想するものは、東方、青、青春、青龍、心華やぐ季節、恋心、心浮き立つ、艶っぽさ、寂しさ、などがあります。いずれも女性の感情を表すときによく使われます。

李白は『子夜呉歌（しやごか）』という四季を詠った組詩も書いていますが、その中の〈春〉の詩は次のようなものです。

zǐ yè wú gē
子 夜 吴 歌

qí yī chūn
其 一〈春〉

qín dì luó fū nǚ
秦 地 罗 敷 女
cǎi sāng lǜ shuǐ biān
采 桑 绿 水 边
sù shǒu qīng tiáo shàng
素 手 青 条 上
hóng zhuāng bái rì xiān
红 妆 白 日 鲜
cán jī qiè yù qù
蚕 饥 妾 欲 去
wǔ mǎ mò liú lián
五 马 莫 留 连

**秦の地に羅敷（らふ）という名の美女がいた。清らかな川のほとりで桑を摘む。**
**白い手は緑の枝に伸び、ほほ紅が真昼の光に映えて鮮やかだ。**
**「蚕がお腹を空かせて待っていますので私はお暇致します。**
**五頭立ての馬車にお乗りのお偉いお役人様、どうぞお引き取り下さいませ」**

秦の地で桑摘みをしている美女が、言い寄る高級役人をソデにする話です。「五馬」とは五頭立ての馬車に乗ることが許されている州刺史（しゅうしし）または郡太守（ぐんたいしゅ）のことを指しています。今なら運転手付きで高級車を乗り回すお偉いさんといった感じでしょうか。「羅敷（らふ）」というのは美女の名前です。『子夜吳歌』とはそもそも東晋の頃、子夜という名の女性が作った曲だったそうです。「呉歌」とは江蘇地方の民謡のことです。李白はその形式に擬して作っています。

「秦」や「桑」の文字からは中国の小学生も暗記している有名な『陌上桑』という、楽府形式の物語風長篇詩に出てくる桑摘みの女が連想されます。この詩のヒロインは「秦氏の女（むすめ）」ということになっています。「これはね、今で言うセクハラ上司を毅然とやり込める女性のイメージです」と植田先生。李白の『子夜吳歌』〈春〉は当時すでに人口に膾炙していた楽府『陌上桑』の物語を元歌として成り立っています。

そしてこの両者を換骨奪胎して作ったのが『春思』です。この作品のヒロインに言い寄るのは、郡太守でもなければ、どこかのお偉いさんでもありません。そよそよと寝室に忍び寄って来る春風

です。これではどうにもなりませんね。春風に煽られて、帰らぬ夫への思いは募るばかりです。

唐の時代は今から数えると 1000 年以上も昔なのですが、それ以前にも沢山の詩や歌がありました。詩は字数が限られていますが、例えば今回の「秦」と「桑」という二文字だけで、桑摘みの美女が、言い寄る男をソデにするシーンが読み手にイメージされます。そこから様々なパロディーの世界が膨らむことになるのです。

ところで李白の『子夜吳歌』は、何といっても〈秋〉が一番有名です。『唐詩選』と『唐詩三百首』の両方に入っているので日・中を問わず人口に膾炙しています。「長安一片の月」という出だしからしてまず強烈なインパクトがあります。「この月は満月ではないようですね。日本語にも《片割れ月》という表現がありますが、詩の内容から見て、恐らくそんなイメージではないでしょうか」と植田先生。李白が故郷に別れを告げる際に詠った『峨眉山月の歌』の出だしは「峨眉山月半輪の秋」ですが、これも別れを暗示する《片割れ月》ですね。

**長安に一片の月が掛かっている**

zǐ yè wú gē
子夜吳歌

qí sān qiū
其三〈秋〉

cháng ān yī piàn yuè
长安一片月
wàn hù dǎo yī shēng
万户捣衣声
qiū fēng chuī bù jìn
秋风吹不尽
zǒng shì yù guān qíng
总是玉关情
hé rì píng hú lǔ
何日平胡虏
liáng rén bà yuǎn zhēng
良人罢远征

**あちこちの家から砧（きぬた）で衣を叩く音が聞こえる**
**秋風が絶え間なく吹いている**
**いつになったら外敵を平定し**
**夫は遠征をやめて帰ってくるのだろう**

これも兵役に取られた夫を待つ妻の思いを代弁する閨怨詩ですが、まず外敵を平定し、凱旋して帰ってくることを前提としていますね。脱走したり、病気やケガで帰ってきてもその後まともに生きる道はなかったのでしょうね。自分の力ではどうにもならないことが誰の人生にもあると思います。砧で衣を叩く時、妻たちはそのやるせない気持ちを込めて、辺地にいる夫に届ける衣を一心不乱に叩いていたのではないかと想像されます。大酒のみで女好きで自由奔放な生活を送っていた李白も、罪のない人たちが戦争で亡くなるのは絶対嫌だったに違いありません。

振り返れば人類の歴史はまさに戦争の歴史とも言えます。これまでどれほどの若い男女が引き裂かれてきたことか。妻子を置いて戦場に赴いた男性たちの孤独と苦難、夫や恋人の無事を祈りつつ一日千秋の想いで待ち続ける女性たちの胸の内は、古今東西全く同じだろうと思います。

ところが、SNS が発達した今、バーチャル恋愛やバーチャル婚などという新たな男女関係を求める人も出てきました。会えない、連絡が取れない、という不安から解放されましたが、会えた時の感動は薄くなり、連絡さえ交わしていれば物理的に一緒にいなくてもいい、という価値観が現れてきたことは確かです。今後、人間の愛の絆はどんな方向に向かうのか、気になるところです。

# 中国の歴史を彩る美人百花 (9) 薛涛

寺西俊英

私が薛涛（768～831 年？）を知ったのは、たしか 2010 年頃のことである。友人の今は亡き M さんから私製本「成都短期留学記」を頂きその成都のことで話が盛り上がった時である。M さんは毎年のように中国の大学に５～６週間の短期留学をされ、都度その時の様子を本にされていたのだ。M さんの成都での留学先は四川大学で、隣に「望江楼公園」があり、その中に薛涛の記念館や高さが２メートル余りの立像、そして後述する有名な薛涛井などがあった。

私は 2012 年の１月末四川省が生まれ故郷の友人と成都双流国際空港で合流し、初めて成都に足を踏み入れた。勿論四川省はこの時が初めてである。なぜ 2012 年かと言うと、その前年あたりだったと思うが私がよく利用する ANA が成田から成都への直行便を開設したからである。この時は開設して間もないころで PR が足りなかったのか、定員が 200 人くらいの飛行機であったが行きは 50 人程度、帰りは CA に聞くと 15 人の乗客で申し訳ない気がするくらいであった。

薛涛井

成都には 1 月 30 日から 2 月 3 日まで 4 泊 5 日の短い期間ではあったが、2 月 1 日には以前来日され一度お会いしたことのある留学生のお母さんとご主人に市内各所を案内していただいた。市内は天府広場を中心に環状道路が幾重にも造られている。天府広場の周辺の道路は道幅が広く、車道、歩道、その間にある自転車道が緑地帯で区切られているところが多く、ゆったりとしていた。地下鉄も何路線か走り始めたところで近代都市に生まれ変わっていた。薛涛の生きたおよそ 1200 年前の名残は殆ど残っていなかったが、その中で望江楼公園は多少当時の名残りを感じさせるものがあり、ほっとした気持ちになったものである。

彼女の白い像

さて、薛涛は中唐の詩人であり職業は妓女である。妓女と言ってもそこいらの妓女ではなく、9 月号で紹介する予定の晩唐の詩人・魚玄機と〈詩妓〉の双璧である。生まれは長安。父の赴任と共に成都に移った。ところが彼女が 14～5 歳の時父が死去したのだ。母と二人での生計を立てるため、父の友人を頼って節度使・韋皐の家妓となり妓女の道に入った。家妓とは、妓館に属さず個人に所属する妓女のことを言う。少し横道にそれる。中国はすぐ「四大○○」という言い方が好きで「四」という数字が好きである。まず唐代四大女詩人というものがあるが、それは薛涛、魚玄機、李冶、劉采春である。次に蜀中四大才女は、薛涛、卓文君、花蕊夫人、黄娥でどちらも薛涛が名を連ねている。（魚玄機は四川の人ではない）ところが古代四大才女は、これまで本誌で紹介した卓文君、蔡琰、上官婉児、に加え李清照であり、残念ながら薛涛の名はない。私なら古代六大才女として彼女と魚玄機を入れたい。何しろ当時の名だたる詩人の白居易、杜牧、元稹などと詩の応酬ができた才女なのである。また王羲之の書法を学んで書家としても認められた。

話を戻すと、剣南西川節度使は蜀の最高権力者である。従って家妓は何人もいたが、薛涛が最も若くて美しい上、詩もかな

りなレベルなのでとても気に入ったのである。韋皐には玉笙（ぎょくしょう）という名の正妻がいた。ある書物によれば本当は薛涌に秘かに心を寄せていたが、正妻の前ではそのそぶりを一切見せず、逆に正妻たちの前で薛涌を叱責したりする、世間の評判を気にする小心者であったらしい。玉笙は、韋皐が薛涌に心を寄せていたことは女の感で知っていたが、韋皐が玉笙の部屋に足が向かなくなって久しく籠の鳥と同様な生活を送っていた。薛涌とはライバル関係となっても不思議ではないが、なぜか薛涌とは仲が良くお互いの境遇を慰め合っていた。玉笙は正妻の座に就く前は歌妓であり二人とも囚われの身と言っても過言ではなかったのである。そのような中、韋皐は 805 年、61 歳でこの世を去った。薛涌 37 歳の時である。二人は自由の身になり、この屋敷にそのまま居ることもできたが、〈浣花渓〉の地に家を建て移り住んだ。1200 年前は、どのような地であったかは分からないが、おそらく風光明媚なところであったに違いない。私はこの辺りを散策したが薛涌が歩き回った地だと思うと感慨深かった。

節度使の庇護から離れた二人は、自分たちで生活して行かなければならなくなった。薛涌はなじみの妓楼のおかみと交渉して自前の妓女としてお座敷にでるようになった。この頃はすでに彼女は詩妓として押しも押されもせぬ存在になっており、その名は長安の都にまで聞こえていたのである。中央から役人が来たときには、指名が多かったようだ。こうして二人だけの平穏な生活が送れるようになったのも束の間、玉笙は病に伏せりあっけなく亡くなってしまった。薛涌より 10 歳年長なので 50 歳にもうすぐ手が届くころであった。母もすでに亡く一人きりになった薛涌が寂しい日々を送っていたころ、彼女の館に数人の男が訪ねて来た。彼らは、「我々は紙漉き職人です。お宅の庭に大きな井戸がありますね。その井戸の水をお借りして紙を漉きたいのです。」と来意を伝えた。彼らの親はこの井戸の水で上質な紙を漉いていたが、節度使にこの地を取り上げられ紙漉きができなくなったというのだ。紙漉きに興味があった彼女は了解し、見よう見まねで紙を漉くことができるようになっていった。こうして彼女が編み出したのが、有名な〈薛涌箋〉である。当時の紙は巻紙状になっており、短い詩文を書くときはいち

彼女のお墓

いち切らねばならず不便であった。薛涌箋は初めから適当な長さに切ってあり、紅色のものは文人たちがこぞって求めたという。晩年彼女はこれによる収入で余生を送ることができた。紙漉きに使ったこの井戸は、薛涌井と呼ばれるようになり、冒頭に書いた望江楼公園の一角にある。

望江楼公園には望江楼という三層の建物があり、そこから公園の名が付いたが、できることなら私は薛涌公園に名を変えて欲しいと思っている。この公園には、井戸だけでなく、薛涌のお墓があり、また真っ白で見上げるような美しい像が微笑むように立っている。また、彼女は竹を愛していたことから公園内には、中国各地の竹を集めいくつもの竹林がつくられている。公園の傍には錦江が流れている。成都市は戦国時代以来〈蜀錦〉と呼ばれる錦織の産地であった。以前の川の名は、府河と言ったがこの川で蜀錦を洗って仕上げたことから錦江という名が付けられた。

本稿の最後に、彼女の恋について付言したい。彼女が42歳のころ、都から監察御史の元稹（779～831年）がこの地に赴任してきた。彼は中唐の詩人で白居易とは親友の間柄であった。薛涌より11歳も年下である。二人は出会ってすぐ恋に落ちたようである。彼女は玉笙が亡くなり一人で過ごしたときと思われ、おそらく新しい監察御史の歓迎の宴に呼ばれ、詩の献応をしたのではと思う。二人はおよそ一年間共に過ごしたが、元稹に洛陽への転勤命令が来てこの恋は終わりを告げた。二人の亡くなった年が 831 年と同じであるが、彼女の亡くなった年号は諸説あるらしい。　（続く）〈今号の写真は筆者撮影〉

河南省或いは「中原」雑感―(14)

# 『中原経済区規劃』を読む

文と写真＝村上直樹

中原崛起(くつき)を象徴する『中原経済区規劃』(以下、『規劃』)は、**第一章**「発展基礎」でこの地域の発展にとっての優位性を5つ挙げている。その4番目は「市場潜力巨大」(市場の潜在力が巨大であること)である。その内容としては、まず、城鎮化率(都市化率)が 40.6%(2011 年時点)で、この水準は正に工業化と都市化が加速する段階である、と述べられている。

中国では全地域を城鎮(地区)と郷村(地区)の大きく2つに分けて捉えている(両方併せて、城郷)。城鎮は都市部、郷村は農村部に対応する。各地域がどのような基準によって分けられているのかは国家統計局から2008年に発布された『統計上劃分城郷的規定』に示されている。

この『規定』によると、城鎮はさらに「城区」と「鎮区」から成る。前者は、たとえば市(地級市)においてその市街地を覆う行政単位・区の役所が建っているような規模の大きな都市などを指す。また、後者の「鎮区」とは、県の役所が所在するような中小都市などを指す。また、城鎮に分類するのに相応しいか否かは、公共施設、居住施設等の整備状況も加味されるようである。原則として、末端の自治組織である「居民委員会」と「村民委員会」を分類単位としているが、常住人口(1 年間に 6 か月以上、当地に居住している人の数)が 3,000 人を超える独立した工場敷地、研究機関、大学、農場管理組織の所在地等も「鎮区」に含まれる。そして、郷村とは城鎮以外の地区である。

上記『規定』はごく簡単なもので読んでも具体的な区分の基準はよくわからないが、ある地域がどちらに区分されているかは、2009 年に国家統計局から発布された『統計用区劃代碼和城郷劃分代碼編制規則』による代碼(コード)を国家統計局のホームページで調べることで確認できる。このコードは15桁の数字から成り、その13桁目の数字が1の場合は城鎮、2の場合は郷村を示す。

今、最新(2020 年 6 月 30 日時点)のコードに従って例をあげると、たとえば、河南省の開封市には 6 つの区と 4 つの県が存在するが、そのうちの一つ「蘭考県」には「紅廟鎮」という行政単位・鎮がある。さらにその鎮の下には、27 の「村民委員会」が存在し、その内 11 が城鎮に、16 が郷村に分類されている。たとえば「紅廟西村民委員会」のコードは 410225104200121 であって城鎮、一方「双楊樹村民委員会」のコードは 410225104201220 であって郷村というように。このことから、たとえ「村民委員会」の自治範囲であっても郷村とは限らないとわかる。

『規劃』にある城鎮化率とはその地域(たとえば、中原経済区)における全常住人口に占める城鎮人口の比率である。城鎮化率は、郷村から城鎮に人が移ること、および、もともと郷村に区分されていた地域が城鎮に区分されるようになること、によって上昇する。先の例に戻ると、10 年前の 2009 年 1 月 1 日時点では27の「村民委員会」のうち、城鎮は7、郷村は20であった。この間、城鎮が 4 つ増えている。人口の変化は不明だが、区分が郷村から城鎮に変更された分、城鎮化(都市化)が進展したことは間違いない。

ここで比較のために、日本では都市化の程度をどのように測っているかというと、1つは、市・区・町・村のうち、市・区に居住している人口を総人口で割った値、「市域人口比率」である。ただし、市と言っても都会とは思えない自然豊かな地区を含んでいる場合も多く、逆に町であっても中心部はかなりの都会である場合もある。そこで、より実態に合わせた指標として「国勢調査」では一定の人口規模と人口密度を基準とした「人口集中地区」(DID)という概念が用いられ、この「人口集中地区」に居住する人口が総人口に占める比率(DID 人口比率)を都市化の指標としている。

10年前の数字になるが、2010年の「市域人口比率」と「DID 人口比率」は、それぞれ91%と67%である。前者の指標に従うと日本における都市化はすでに達成されたと言えるかもしれないが、後者の指標に従うと、それが望ましいかは別として、まだ都市化への余地がかなりある。

さて、『規劃』が言う「市場としての潜在力」のもう1つ別の側面は、人口そのものが多いことである。2011年末の中原経済区における総人口は1.79億人(中国全体の約 13.3%)、うち河南省だけで 9,388 万人を

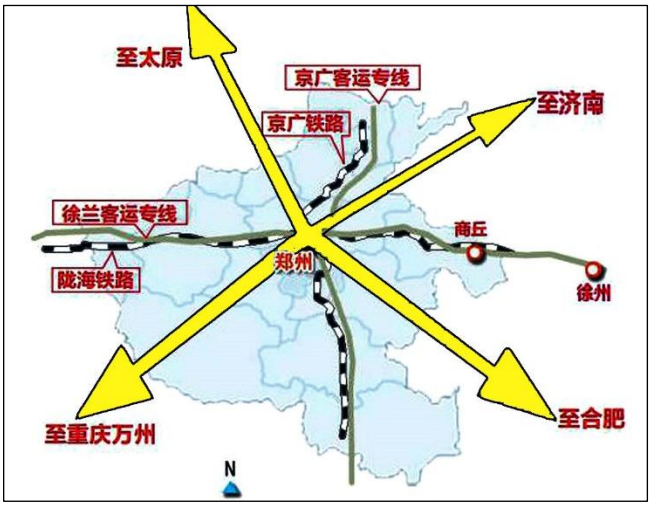
数える（中国全体の約7.0%）。人口については、つい先日の 5 月 11 日、10 年ごとに実施される全国人口普査（センサス）の第 7 回目の結果が公表された。中国の総人口は 141,178 万人（2020 年 11 月 1 日時点、香港・マカオ・台湾は除く）である。河南省の人口は 9,937 万人であり、総人口の約 7.0%を占める。なお、河南省の人口規模は、31 省の中で広東省（12,601 万人）、山東省（10,153 万人）に次ぐ第 3 位である。

中原地域が有する発展にとっての優位性の第 5 番目は「文化底蘊深厚」（文化的背景が奥深い）ことである。その内容は、中原地域は中華民族と華夏文明の重要な発祥地であり、歴史は悠久であって貴重な歴史文化遺産が大量に存在し、文化的影響力（アメリカの政治学者、ジョセフ・ナイのいうソフトパワー)が不断に増強されている、というものである。

『規劃』の第一章は第二節「機遇与挑戦」(好機と挑戦)へと続く。この節では、後半部分で中原地域が発展する上で解決すべき矛盾・課題が指摘されている。まず挙げられているのは、農村人口が多いこと、農業の比重が高いことである。これらは、すでに述べたように、発展にとっての優位性でもあったはずであり、正に矛盾と言える。さらに、「保糧任務重」(穀物生産確保という任務が重い）という事情もある。これは、国全体として穀物の生産量を確保しなくてならないという要求と、河南省としての非農業の発展追求との間に齟齬が生じているということであろう。

**第二章**「総体要求」（全体的要求）で具体的な数値目標が掲げられた後につづく**第三章**は「空間布局」(空間分布）という標題がつけられている。とくにその第 2 節は「構建“米”字形発展軸」(「米」字形発展軸の構築）である。この「米」字形とは以下のような 4 本の発展軸を意味する。これらはいずれも中原経済区の中心都市・河南省鄭州を通っているため、「米」字の形に見える(**地図参照**)。

①沿隴海発展軸：地図では「隴海鉄路」および「徐蘭客運専線」（徐州・蘭州高速鉄道）と記されている。「隴海鉄路」(または「隴海線」)とは江蘇省連雲港と甘粛省蘭州を結び華中を東西に貫く重要鉄道幹線である。なお、この鉄道はさらにオランダのロッテルダムに至る。この発展軸は、前回、全国レベルの都市化戦略として紹介した「両横三縦」における「陸橋ルート」に対応する。中原経済区でこの発展軸上に並ぶのは、三門峡、運城、洛陽、開封、商丘、淮北、宿州、菏沢の各市である。



「米」字形発展軸（『百度百科』「河南高鉄規劃図」より）

②沿京広発展軸（北京・広州に沿った発展軸）：地図では「京広鉄路」および「京広客運専線」（北京・広州高速鉄道）と記されている。この発展軸は「両横三縦」における縦の線「京哈京広ライン」に対応する。中原経済区でこの発展軸上に並ぶのは、邢台、邯鄲、安陽、鶴壁、新郷、許昌、平頂山、漯河、駐馬店、信陽の各市である。

③沿済鄭渝発展軸（済南・鄭州・重慶に沿った発展軸）：地図では鄭州を起点とし、山東省済南および重慶（万州）に向けた矢印で示されている。この軸に関わるのは、聊城、濮陽、平頂山、南陽である。

④沿太鄭合発展軸（太原・鄭州・合肥に沿った発展軸）：地図では鄭州を起点とし、山西省太原および安徽省合肥に向けた矢印で示されている。この軸に関わるのは、長治、晋城、焦作、済源、周口、阜陽である。

『規劃』の第四章からは各論である。まず、**第四章**「推進新型農業現代化」（新型農業近代化を推進する）で農業について具体的な発展戦略が示されており、**第五章**「加快新型工業化進程」（新型工業化過程を加速する）では、製造業を中心に中原経済区における産業発展について述べられている。そこでは服務業（サービス業）の振興も大きなテーマの１つである。中でも中原地域における豊富な歴史・観光資源を利用した旅行業に対する期待は大きい。

中原経済区内には 2012 年時点で国家が認定する最高級の景勝地、5A 級景区が 9 か所存在した。具体的には登封嵩山少林(2007 年)、洛陽龍門石窟(2007 年)、焦作

雲台山―神農山―青天河風景名勝区(2007 年)、開封清明上河園(2011 年)、洛陽白雲山(2011 年)、安陽殷墟景区(2011 年)、平頂山堯山―中原大佛景区(2011 年)、洛陽欒川老君山・鶏冠洞旅遊区(2012 年)、晋城皇城相府(2011 年)である(括弧内は認定された年)。

この認定制度は、各景勝地の歴史・文化的価値に加えて交通の便、ガイドの質、衛生状況、入込客数等を基準にしている。第 1 回目は 2007 年 3 月 7 日に公布され、中原経済区内の少林（寺）、龍門石窟、雲台山の 3 か所を含む、全国 66 か所が認定された。その後 38 回に亘って追加され(取り消しもある)、2021 年 5 月 19 日の時点で全国 304 か所が認定されている(『百度百科』「国家 AAAAA 级旅游景区」より)。

これらのうち、私は、ユネスコの世界文化遺産にも認定されている洛陽龍門石窟を 2010 年 5 月 23 日に見学することができた。この石窟は 493 年、北魏の孝文帝の時代に彫り始められ、その建造は唐朝において最盛期を迎え、その後清末まで 1400 年余り続けられた。伊河(伊水)を挟んで東西の山の斜面に、南北 1 キロメートルに亘って、大小さまざまな 11 万体余りの仏像が彫られている。写真は、伊河の対岸から石窟全体の最大の見どころである盧舎那大仏(るしゃなだいぶつ)を撮ったものである。この大仏は高さが 17.14 メートルあり、唐朝に武則天(則天武后）が自分の容姿に似せて彫らせたと言われている(『百度百科』「龍門石窟」より)。

伊河の対岸と言うと、白居易のお墓（白園）があることでも知られる。ここには 1988 年 7 月、日本中国文化顕彰会が建てた碑がある（写真）。碑文は中国語と日本語で書かれており、中国語では「偉大的詩人白居易先生、您是日本文化的恩人、您是日本挙国敬仰的文学家、您対日本之貢献、恩重如山、万古流芳、吾輩永志不忘。謹呈碑頌之。」とあり、日本語では「不朽の

日本中国文化顕彰会による碑(2010 年 5 月)

詩人にして後世文学の恩人、白居易先生の日本文化並びに日本人に対する多大な貢献に心から感謝の念を捧げます。」と書かれている。

落款者は酒井邦恭、丹野喜三郎、宮下研一、桧山翠、松峰康朗の各氏であり、この碑の元の文字を書いたのは李進学という人のようだ。日本中国文化顕彰会とは一体どのような団体なのか。現在でも存続しているか等、インターネットで少し検索しただけではわからなかった。

**第六章**「加快推進新型城鎮化」では『規劃』全体にとって中心的なテーマである城鎮化が詳しく取り上げられ、中原経済区内の城鎮を、鄭州、重要中心城市、地区性中心城市、県城、中心鎮と階層づけた上で、それぞれの都市機能を向上させることが目標に掲げられている。とくに興味深いのは「新型農村社区」の建設を推進しようとしている点である。これは、農村部にありながら、住居を集中させることによって都市部と同様の公共サービスの提供を可能にしようする取り組みである。写真は、2014 年 11 月 28 日に私が訪れた河南省周口市商水県袁老郷の「新家園社区」である。まだ建設途中であったが、広々とした農地に囲まれた一角に真っ赤な近代的住宅群がひと際目を引いた。

龍門石窟(2010 年 5 月)

新家園社区（2014 年 11 月）

# 中国の面白い神話物語・伝奇物語（7）

顧 傑

皆様、お久しぶりです。

狐が美女美男に化けて人を騙す…という話はよくあります。中国では商紂王（しょうちゅうおう）を堕落させ、万民に塗炭の苦しみを与えた妲己（だっき）、日本では鳥羽上皇の寵姫玉藻前（たまもまえ）もその本性は狐といわれています。日中共に、狐には「妖怪」、または「妖狐」として、あまり良い印象がないようです。

しかし実際は、日本では稲の神様稲荷神の御使いとして長く愛されて、各地の稲荷神社の前に鎮座しています。では、中国ではどうでしょう？ 面白いことに、唐伝奇の中にも狐が美女になった話があります。今回はこのお話をご紹介します。

～～～～～～～～～～

ある所に、葦（い）という人がいた。その地方で一番偉い人の孫で、若い時は勝手気ままでだらしのない生活をし、酒を水のように飲んでいた。

葦氏の遠い親戚に鄭（てい）という人がいた。鄭氏は多少武芸のたしなみがあるものの、貧乏で自分の家は無く、妻の家に居候していた。彼らは共に酒と女色が好きなため、仲良くしていた。

『任氏伝』より（ウィキペディアから）

天宝 9 年（唐玄宗治世の後期）の夏、葦氏と鄭氏は長安（唐の首都）の大通りを散歩しながら、今日はどこで飲もうかと相談していた。ようやく場所が決まったところで、鄭氏は用事を思い出し、酒屋で落ち合う約束をして別れた。

葦氏は白馬に乗って東へ行き、鄭氏はロバに乗って大通りを先に進んだ。しばらく行くと、道の端に三人の女性がいた。真ん中の白い服を着た女性は、鄭氏が今までに見たこともないほどの美貌の持ち主だった。

鄭氏は彼女にすっかり心を奪われてしまった。彼女の気を引こうと周りをうろつくが、直接声をかける勇気は出ない。その様子を見て、白い服の女性は口元を隠して、「くすっ」と小さく笑った。

鄭氏はそれを聞くと、ようやく勇気をだして冗談めかして訊いてみた：

「貴女のようなきれいな女性が、なぜ歩いているのでしょうか？」

白い服の女性は微笑みながら答えた：

「どなたかが乗せてくださらなければ、自分の足で歩くしかありませんわ」

鄭氏は大喜びでロバから降りて：

「粗末なものですが、どうかお乗りください。私めは歩いてお供させていただきます」と、言って、すっかり仲良くなった。

歩いているうちに日が暮れて、あたりは暗くなって来た。ちょうどその時、大きな屋敷の門の前に着き、中に入る前に、女性は鄭氏に尋ねた：

「お名前を伺えますか？」

「鄭だ。家では六子になる。貴女は？」

「わたしは任（にん）です。家では二十人目の娘です。」

女性は門の中に消えたが、鄭氏は去りがたく佇んでいると、中年の女性が現れて鄭氏を門の中に招じ入れ、任氏の元へ案内してくれた。

着替えを済ませ、化粧も直した任氏は、鄭氏の目には仙女のように見えた。二人は太陽が再び昇るまで楽しく語り合った。

夜が明けたので、名残惜しく思いながら屋敷を辞した鄭氏は、近くで朝食を商う屋台で一休みしながら訊いてみた。

「その角を曲がったところの大きなお屋敷は、どなたのお宅ですか？」

「あら兄さんご冗談を。あそこはすでに朽ちていたはずだよ…もしや」

と、店主が何か思い出したように：

「最近この付近では、狐が女に化けて男を誘う噂があるけど、兄さんも出会ったか？」と言う。

鄭氏は顔を赤くしながらも否定した。

暫くして、鄭氏は再び任氏の家のあたりに行ってみたが、やはり朽ちた庭園だった。自宅に戻ると、葦氏が約束を破った理由をいろいろ聞いてきたが、鄭氏は適当に誤魔化した。

十日ほど経った頃、鄭氏はまた任氏を見かけた。任氏は人込みに紛れて逃げようとしたが、鄭氏は人をかき分けて任氏に近づいた。

任氏は逃げられないと悟り、扇子で顔を隠して：

「貴方はすでに私の本性を知っておられるのに、なぜまだ私を探そうとするのですか？」

「知ったところでそれがなんだ！」

「私のことを嫌いになったと思って…」

鄭氏が誓って真心を述べたので、任氏はようやく扇子を降ろし、顔を見せるようになった。

「人間の皆様は、私たちが人間に危害を及ぼすと思っておられますが、それは違います。少なくとも私は、最後まであなたに尽くします」

鄭氏は葦氏から家を借りて、任氏と同棲を始めた。ある日、任氏は鄭氏に言った。

「どうか5千銭をお借りください。貴方にお金を儲けさせて差し上げます」

鄭氏が妻の家から銭を借りてくると、任氏は、

「今から市場に行って、足が不自由な仔馬を買ってください。理由は聞かないでね」

鄭氏は任氏の言うままに行動したが、妻や親戚のひとたちには馬鹿にされた。

数日後、任氏は鄭氏に：

「あの馬を市場に売りに行ってください。ですが、3万銭でしか売ってはいけません」

鄭氏が市場に行く途中ですぐ、身なりの良い人に呼び止められた。その人はその馬を 1 万銭で買おう言ったが、鄭氏は断った。すると先方は 1 万５千銭と言ったが、鄭氏はやはり売らなかった。

段々と二人の周りに人が集まって来て、二人のやり取りを面白そうに見ていた。買い手が 2 万 5 千銭まで値を上げたところで、周りのやじ馬が声を上げた。「そんな値段でも売らないとはどういうことだ」と。

鄭氏はその言葉に屈して、2 万 5 千銭で売ってしまったが、気になって葦氏に調査を頼んだ。

あの買い手は皇帝の従者だった。皇帝はある足の悪い馬を可愛がっていたが、最近死んでしまった。そのため、6 万銭を出して世の中から似たような馬を買おうとした。任氏の言葉の通り 3 万銭で売ったとしても、買い手はちゃんと 3 万銭を儲けていたのだ。

それを聞いた鄭氏は悔しがったが、任氏は鄭氏を責めなかった。このお金を元手として、鄭氏の暮らし向きはだんだんと良くなっていった。正妻も鄭氏を尊重するようになり、任氏も第二夫人として認められるようになった。

ある日、鄭氏は出張することになり、任氏を連れて行こうとしたが、任氏に断られた。

「お出かけの間、私はここで待っています」

鄭氏は葦氏にも説得するよう頼んだ。

二人に強く誘われて、任氏はため息をつきながら：

「占い師に、この旅で私は命を落とすと言われました。私は、もっと旦那様のおそばに居たいので、未だ死にたくありません」

任氏が狐だとは知らない葦氏は笑いながら：

「聡明な貴女らしくもない！ そんな占い師の話を信じるのですか？そんなことあり得ませんよ」

二人がかりの説得に、任氏は大きく溜息を吐きながら同行に同意した。

城外に出た二人は、昼頃に朝廷の猟師が猟犬を訓練している傍を通りかかった。猟犬が任氏に激しくほえたて跳びかかろうとするので、任氏は狐の姿に戻って逃れようとしたが、逃げ切れずかみ殺されてしまった。鄭氏は涙ながらに狐の死骸を買い取って家に帰って来た。事情を聴いた葦氏は：

「猟犬は勇猛だと聞いているが、昼日中に人間を殺せるとは思えないが」との疑問を口にした。鄭氏はここで初めて任氏が狐だったと打ち明けたのだった。

その後、二人は心を入れ替え、気ままな生活を捨て、しっかり勉強して、葦氏は役人となり、死ぬまでこの地に戻ることはなかった。鄭氏は任氏が残してくれたお金を元手に一財産を築き上げたのだった。

今月のお話はここまでですが、如何でしたか？

古代中国は男性上位の世の中、との印象がありますが、唐朝においては、女性の自立や、聡明さを主題とした物語も数多くみられます。

今月のお話も、妖怪が登場しますが、内容は主人よりも賢い女性の物語です。おそらく当時の女性の地位は、我々が今想像する以上に高かったのでしょう。またそんな女性のお話をご紹介出来るでしょう。

# 「秦皇島」をご存知ですか？……(6)

文と写真　吉光　清

高鉄「秦皇島駅」に隣接した市内バスの発着所から 34 番の路線バスが（市街地の渋滞が無ければ)、「北戴河バスステーション」との間を片道 30 分余りで往復している。便数が多く、タッチの差で発車を見送っても直ぐに次のバスがやって来て、“次のバスは何分後だろう”と気にする必要は無かった。市内バスに関しては、各バス停にも、（日本のように）運行時刻を詳しく示す表示は見当たらなかった。渋滞時には同じ路線番号のバスが連続して走っているのを見ることもある。発着時間の細かな調整などは行わないのであろう。

34 番の路線バスは車掌が乗務し、終点までの料金は２元であった。「迎賓路」を南下し、「人民広場」に突き当たって左折し「建設大街」に入り、直ぐに右折し「文化北路」を更に南下する。そのまま南下を続けて鉄道線路を越えると「玻璃博物館」に近づくが、鉄道線路の手前で右折して「河北大街中段」に入り、北戴河に向かう。この路線バスのルートに合わせて、沿線の観光資源を紹介してゆくことにする。

**■「河北大街西段」は学園銀座！**

河北大街が「中段」から「西段」へと変わると、南西方向に向かうようになる。この路線に繰り返し乗車するうちに、「大汤河」に架かる橋を渡ると間もなく、道路の両側に学園のキャンパスらしい風景が現れることに気付いた。停車するバス停の表示を見ると「燕山大学」とあった。河を渡りバス停までの間にも学校らしい建物や敷地があったので、後に文房具店で市内地図を買って眺めたら、「耀华职工大学」、「中国环境管理干部学院」、「海关学校」、「玻璃技校」、「燕山大学继续教育学院」、「河北科技师范学院」が目についた。道路から北側に外れたところには「东北大学秦皇岛分校」、南に外れて海岸に近づいたところには「中国足球学校」、「秦皇岛航海运动学校」があることも分かった。バス停の北側には燕山大学の広大なキャンパスが広がり、バス停の先にも「河北科技师范学院欧美学院校」、「中国地质大学秦皇岛实习基地」、「东北石油大学秦皇岛校」の名前があった。まさに高等教育施設が軒を連ねている様子であった。

地図では河北大街の南側を遠く離れて鉄道が並行して走り、それを越えた海際には海水浴場や旅行客向けの「イルカショー」や「水族館」の施設があることが分かった。それらへは19番の路線バスが利用できるようであったが、生憎、訪ねる機会は無かった。

百度地図で最近の状況を覗いて見たら、往時は無かった「河北建材职业技术学院」がある。逆に「耀华职工大学」と「玻璃技校」が見当たらない。共にガラス工業に関連していそうだったので、二つの学校は統合されて、新しい名称の教育機関になったのだろうと推測した。“学院”が中国の高等教育制度上にどう位置づけられるのかは良く分からないが、新しい要素を取り入れ、受験生の関心を高め、教育環境を向上させて、入学希望者を増やそうとするのは、日本の教育機関と同様であろう。

**■『燕山大学』の意外な生い立ち**

燕山大学は隠れた観光スポットとして、学生以外でも利用できるオープンな食堂、ゆっくり散歩できる広大な敷地、校舎の最上階からの眺望の良さが紹介されていたが、他方で、「燕山大学卒」の人が地元では一目置かれているような印象を受けた。そこで、どのような大学なのかと気になり、ちょっと調べてみる気になった。

此の地域は、清朝の時代から、石炭の積出港として栄え、ガラス工業などが生まれた、早くに工業化した地域だったのだから、此の地にある大学も、そうした歴史を共に歩んで来たものと一人で合点していたが、燕山大学の歴史は意外なものだった。

大学創立は1920年と謳われているが、それは哈爾浜（ハルビン）に「哈爾浜中俄工业学院」が創立された年を意味している。その後、「哈爾浜工业大学」となり、国務院による全国重点大学の一つに選ばれ、1958 年にはチチハル市に分校として「哈爾浜工业大学重型机械学院」が設置された。1960 年に「东北重型机械学院」として独立し、1980 年に全国重点大学の一つに指定され、秦皇島市に移転したのが 1985年であり、現在の「燕山大学」と改称されたのは1997年のこと

だったとは意外であった。

大学の HP によれば、河北省人民政府と教育部、国家国防科技工業局などによって共同運営される国立大学として、工学、文学、芸術学、管理学、理学、法学、経済学、教育学の分野で64学科を擁する総合大学である。工学分野は32学科で最も多く、中でもコンピュータ科学の４学科は世界のトップ１％にランクされている。５学科は「国家特色科目」に指定されている。他に、管理学分野の「旅游管理」も「国家特色科目」になっている。

4,000 亩の敷地に、大学院と 14 の学部の他に、リレン学院、国際教育学部、継続教育学部があり、一般高等教育に在籍する学生は 38,000 名、教員は 3,200 名、専任教員が 2,200 名で、そのうち、教授が 509 名、准教授が 678 名である。

北京市、天津市を除いた河北省内の大学では、河北大学(保定市)、河北师范大学(石家荘)などと並ぶ有力な大学であり、わんりぃ 257 号で村上氏が解説された「双一流大学」に入っている大学である。

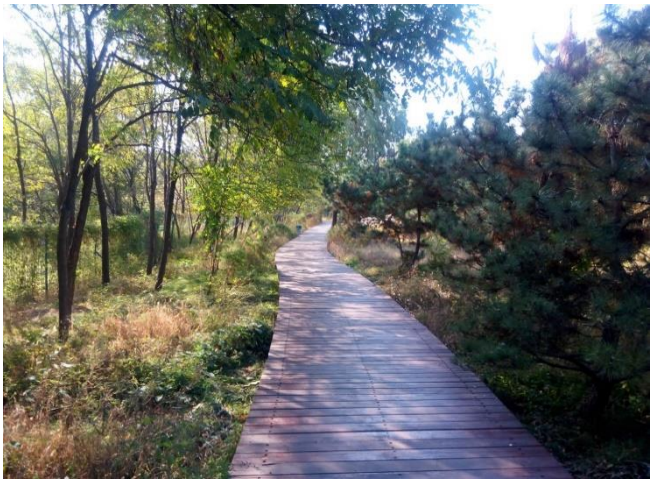
余談を一つ：学生街の近くに、「どんな店があるかな」と百度地図を見ていたら、“海底捞”の文字が目に飛び込んで来た。先日、小田急町田駅の出口付近でお昼に利用した店だった。町田にもあるゾ！

**■渚のボードウォーク散歩と干潟見物**

バスは燕山大学の敷地の外れの交差点を左折し、「滨海大道」に入ると車窓風景は一変し、左側に海を見ながら走るようになる。この路線に数回乗車して、大きな干潟と湿地帯があることを知ったので、ある時、少し歩いてみようと思い立ち、途中で下車した。10 月下旬だった。

「观鸟湿地」というバス停で下車したのは自分だけだった。バスに乗車して車掌に運賃を払う時に、

展望所から干潟を遠望する（2016 年 10 月撮影）



林の中の木道の脇にはススキ（2016 年 10 月撮影）

バス停名を書いたメモを見せて「ここで降ろしてほしい」と伝えて安心し切っていて、声を掛けられて慌てて下車した。右側通行なので海とは反対側に降り立ったが、周囲には表示や看板は何も無く、人影も見えない。海に近づこうと道路を横断して反対側に渡ったら、幅広の、立派な木道が林の中に見えた。気持ちよく歩いて行くと海際に出た。海岸線が湾曲しているので、渤海を挟んだ向こうに市街中心部の高層ビル群が遠望出来た。北戴河方向に歩き始めたが、海岸線に沿って設置されたボードウォーク上の散歩はとても快適だった。

大きな干潟が現れ、白い鳥たちが群れていたが、肉眼ではさしたる観察も出来なかった。数か所に干潟を展望できる屋根無し、ベンチ無しの展望所が準備されていて、望遠レンズを付けたカメラを構えている人々がいた。渡り鳥の季節には、きっと沢山の鳥たちがやって来るのであろう(左下写真を参照)。

湿地が乾燥化して陸地に変わりつつある地帯が現れた。植物や野生動物には貴重な自然環境であると思われ、立ち入りを禁止する掲示やフェンスも設置されていたが、フェンスの海側には沢山の轍が見られた。バギーや単車が乗り入れるのだろうか、心無い仕業をする人がいるなぁと思った。海際の木道は無くなり、林の中の道を木漏れ陽を浴びながらの散歩になった。道の両側にはススキも生え、日本の景色との違いは感じない。(上の写真を参照)

歩き疲れてきたので、「滨海大道」に戻り、バス停を探した。見つかったバス停は「鸽子窝公园」で、下車したバス停から三つ目だった。少し待って、再び 34 番のバスに乗車した。　　（続く）

東北地方の少数民族の民話-(2)

# お 月 様

一瀬靖子／大槻一枝

**最初に・・・・**

**6 月号は、鄂温克族（エヴェンキ族）の民話でしたが、7 月号は同じツングース系の民族である赫哲族（ホジェン族）の民話です。赫哲族は、黒龍江沿いに住む 55 の少数民族の一つです。民族としては、ロシア国内に 1 万人強、中国国内は 5354 人（2010 年調査）住んでいます。河川でのサケ・マス漁などの漁労が代表的な生業で、食生活は魚食が中心です。では、これから前回に引き続き一瀬さんと大槻さんによる「お月様」という民話の翻訳文をご覧ください。**

## ●お月様

川のほとりに、夫婦が息子と共に暮らしていました。息子が成長すると、母親は彼に妻を娶らせました。嫁は美しいばかりでなく、料理、焚き木取りや漁など、いずれも上手にこなし、若夫婦は仲睦まじく暮らしていましたが、若者の母親はこの嫁が気に入りません。

赫哲族[hè zhé zú]（百度百科より）

息子と父親が遠くへ漁に出掛けて行き、家には姑と嫁が残されたある日、姑の里方の甥が彼らの家を訪ねて来ました。美しい従弟の妻を目にとめ、その上従弟が留守と知ると邪念を起こし、いつまでもぐずぐずと長居をしていました。空は、はや暮れかかってきましたが彼は帰ろうとせず叔母の家でぐずぐずと時間をつぶし、その上従弟の嫁にすり寄って、身体にさわったりして彼女を侮辱しました。嫁は耐えきれず、彼に平手打ちを加えて追い出しました。姑は嫁が婚家の親戚も眼中になく、姑を侮辱したと言って憎み何かにつけて嫁を虐待しました。そして嫁に一日十回も焚き木を取りに行かせ、背負って帰らないと罵ったり、一日十回も鍋で雑魚を炒り魚油を取らせたりしました。（昔、赫哲人は魚肉を食し、魚の皮をまとって生活をしていた。雑魚を炒るというのは料理し終わった魚からさらに油をとり、特製の窯を用いて魚をソフトに仕上げること）

できなければまた叩かれます。しかし、嫁は決して困った顔をせずやり遂げました。姑は更に彼女をいじめようと彼女に十斤の雑魚を干して、十斤の魚の干物を作れと言いつけ、今回こそ彼女が困るだろうと思っていました。十斤の鮮魚でどうして十斤の魚の干物ができるでしょう。嫁は更に多くの時間をかけて魚を捕り不足分を補わなくてはなりませんでした。姑はなお怒って、今度は百斤の魚で百斤の干物を作れと命じました。嫁がどんなに有能でも一人ではどうすることもできなくなりました。魚を捕る暇などあるはずがないのです。干物が出来ないと、姑は嫁に食事も与えず彼女を鞭打ちました。

ある日の夕方、嫁は川のほとりに水を汲みに行き、腰をかがめて川面に映った人影を見て驚きました。なんて痩せているのだろう！ これは誰？ そしてさらに驚きました。「あらまあ！ 私はどうしてこんなに変わってしまったの？」彼女は娘の頃を思い出しました。ふっくらした頬、みずみずしく澄んだ目、なめらかに美しかった髪。しかし今はこんなにやせ細り、目は落ち窪み、髪も乱れています。彼女は考えれば考えるほどつらくなりました。姑には嫌な思いばかりさせられ、夫は留守。そして父母とは遠く離れています。こんなにひどい目に遭わなくてはならない日々を、これからどう過ごしたらいいのだろう?! 彼女は小声で

泣き出しました。泣いて泣いてその声は次第に大きくなり、泣くほどに心が痛み、心痛むほどに泣いていると、山や谷も彼女と共に泣き出し、大川の水も彼女と一緒に泣き出すようでした。彼女は川辺の踏み板のところへ水を汲みに来たのでした。思い煩い、座り込んで泣いているうちに胸が晴れて来ました。彼女は模様を刻んだ一対の白樺の桶を見ながら柳の枝に手をかけました・・・。空はすでに暗くなっていました。

少数民族シリーズのうち赫哲族の切手
（百度百科より）

東の山から顔を出した月が、からからと笑いながら彼女に近づいて来ました。月光が鏡のように静かな川面を照らしています。若い人妻はなおぼんやりと座り続けていました・彼女は月の光を見ながら「お月様の中には、きっと神様がいらっしゃる。でなければどうして光を放つことができるだろう？」彼女は独りつぶやきました。「お月様、お月様、もし神様がいらっしゃるのならどうか私をお救いください。私は本当にひどい目に遭っているのです。」

言い終わって彼女が川面を見ると、白い布のようなものが流れて来ました。彼女は腰をかがめてこれを拾い上げました。そして水を汲んで帰ろうとすると、布が彼女の足元に落ち、彼女がこれを踏むと布は空に舞い上りました。驚いて柳の枝に縋りつくと、柳の木は根こそぎ抜けてしまい、彼女は桶を担いだまま柳の木と共に空へ舞い上って月の世界に昇ってしまいました。月の中でよく働く嫁になったといいます。

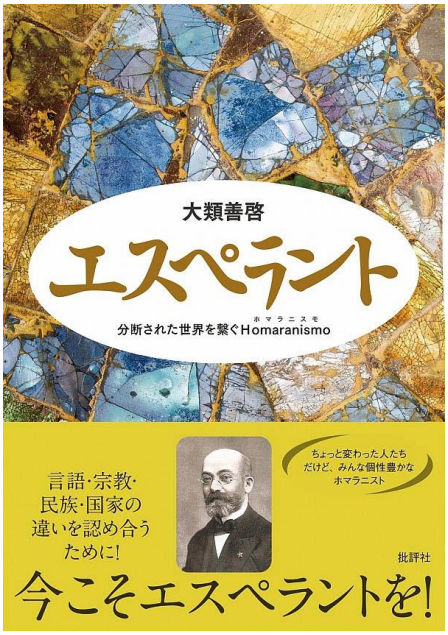
嫁が月に救われて昇天した後、姑はいたるところ彼女を探し回りました・叫びののしり、彼女を見つけ出したら生かしておくものか！ 姑は川のほとりを長い間探しましたが見つかりません。探しているうちに、模様の刻まれた白樺の水桶と天秤棒が無いことに気付きました。水汲みの台の傍らに生えていた柳の木も見当たりません。姑が頭を上げてみると、どこかの嫁が扇面に描かれたように髪を櫛削り、水桶を担いで、柳の木と共に空へ飛んで行きます。おや、誰だろう？ あれはうちの嫁ではないか！ 息子が帰ってきたらどうしよう?! そうだ、嫁は身を持ち崩し、川に飛び込んで溺死したと言おう。

夫と息子が漁から帰って来ました。食事を作る人がいないので、姑が作らねばなりません。水もないので姑が汲みに行かねばなりません。魚をさばくのも洗うのも姑がやらねばならないのです。姑は腹立だしさを呑み込みました。“苦しい”とは言えません。息子は母親に、「母さん、私の妻は？」と聞きました。「品行が悪く、川に飛び込んで溺れ死んだよ」「いつ？ どこで？」「水汲み場のあたりさ。八月十五日の晩だよ」息子は信じられません。彼女はとてもよくしてくれた。正常な人間が川に飛び込むはずがない。きっと母親にいじめられて逃げたのだ。若者は母親と激しく言い合いました。母親は後悔しましたがすでに遅かったのです。若者は妻を案じ続けました。

この日も十五夜で、月はまん丸でした。若者は川のほとりに座って川面を眺め、涙ぐんでいました。大粒の涙がぽつぽつと鏡のように静かな川面に落ちて輪を描き、輪が消えると月影が現れました。見るとそこにいたのは妻ではありませんか!! 彼女はどうして月に昇ったのだろう？ 妻は、〈月の神様が、貴方のお母様に難儀させられている私を助け出してくださったのです〉と言っているようでした。若者は頭を上げてみました。以前、月の中には何も見えませんでしたが、今は柳の木、白樺で作った水桶を担いだ妻が見えます。彼女は月でも有能な嫁になっていました。それから後、八月十五日を迎えるたびに、若者は山からブドウ、梨などの果物を取ってきて妻を祀りました。月の中にぼんやりと見える黒い影は彼の妻と言われています。 （おわり）

# 本誌連載原稿が一冊の本に！　大類善啓

まさか私がエスペラントについて１冊の本を出すとは思いもしなかった。書名は、『エスペラント―分断された世界を繋ぐHOMARANISMO』（批評社 1700 円＋税)である。そのきっかけは、「エスペラントについて書いてくれませんか」という、当時の本誌編集発行人だった田井光枝さんからのメールだった。




「なぜ私にエスペラントを」と思ったが、すぐさま「書きましょう」と返信した。当初は二,三回ほどで終えるつもりだったが、一回目の原稿を送った後だったか、なんだかもっと書きたいような気持になり、「興に乗れば、もっと書くかもしれません」と田井さんにメールをすると、「興に乗れば・・・いいですね。どんどん書いてください」と言われて、それこそ思いつくまま書いていった。結果的にこの連載は、2016 年の３月号から 2018 年 10 月号まで２年半ほど、計 33 回になった。

書き終えてしばらくすると、これをまとめてなんとか本にならないかと思っていたら、ユニークな出版社である批評社が出してもいいと言ってくれた。今回上梓した拙著は、その当時書いた原稿を基に、一部は削除し、また縮小修正し新たに補筆してまとめた。主な内容は、すでに「わんりぃ」で読まれた方はご存じだろうが改めて記すと、ザメンホフがなぜ世界共通語を創ろうと思ったのかの経緯から、エスペラントが日本へどう伝わったのか。そして日本から中国に伝わったエスペラントについて書いた後、日本のユニークなエスペランティストの６人について、それぞれ一章ずつ費やして紹介した。

その６人とは、まず、日中戦争下の中国から日本に向けて「戦争を止めよう」と、ラジオで放送するなど、文字通りエスペラントを創造したザメンホフの人類人主義、「我々は人類の一員である」という思想を体現した女性、長谷川テルについて書いた。そして、その長谷川テルの死を日本に伝え、当時の佐藤栄作首相の訪米に反対の意思を焼身自殺で表した由比忠之進、その由比の同志でもあった『ザメンホフ』（岩波新書）の著者、伊東三郎。そしてアナーキストでもあった山鹿泰治。戦前二度、天皇制国家権力に弾圧された大本（教）の聖師として慕われた出口王仁三郎、そして最後に取り上げた人物が曹洞宗の寺の息子で学校教師の斎藤秀一である。彼は大勢に抗して反戦活動をして何度も獄に繋がれた。

この６人を書いているうちに、アイザック・ドイッチャーが書いた『非ユダヤ的ユダヤ人』のように、日本人の枠を超えて活動した日本人エスペランティスト列伝のようになっていった。もちろん、この６人以外にも有名なエスペランティストはいるだろう。しかし私はこの６人こそ、「日本」という枠を超えて活躍した人たちだと思ったのだ。

そして最後は、「エスペラントはまだあるの？ 死滅していないの？」とか「エスペラントを勉強するより、英語を学習した方がいいんじゃないの」といった現状をどう見るか、そしてエスペラントの存在の意味などを、エスペランティストの木村護郎クリストフ（上智大学外国学部教授）さんなどにインタビューして書いた原稿を新たにまとめて本書を終えた。ぜひ書店かアマゾンかで入手してご笑覧いただければ嬉しいかぎりである。

■**大類善啓(おおるいよしひろ)**：1968 年、法政大学卒業後、欧州、中東、アジアに遊ぶ。週刊誌記者、フリーライターを経て 78 年初訪中。翌 79 年より中国との交流に携わる。81 年、アニメ『鉄腕アトム』の中国・中央テレビでの放映業務。2002 年、日中国交正常化 30 周年特別番組“孫文を支えた知られざる梅屋庄吉”を企画、テレビ朝日で放映。現在、(社)日中科学技術文化センター理事・参与。また、中国ハルビン市郊外にある日本人公墓（1963 年、周恩来総理認可の下、建立）の存在を通じて、日本の中国への加害と被害の実相などを伝えていこうと 2005 年、方正友好交流の会を立ち上げ、理事長として会報『星火方正』を編集発行している。

6 月号のお便りに対する顧傑さんの返信がありました。

～～～～～～～～～

後藤 芳昭さん、鶴川 万里子さん：ご寄稿、ご質問ありがとうございます。また、私の拙文を読んで頂いた皆様に心より感謝しております。

後藤さんへ：

ご意見はごもっともです。私も、結論としては、後藤さんと同じように考えるのですが、そこへ行くまでに、少し考えてみたのです。

敢えて視点を少しずらしてみると、これは「職業のルール」という理性的な考え方と、「人情」という感情的な考え方との二択になります。

この殺し屋は、男と契約を結んで、李勉を殺すという仕事を引き受けたのです。その仕事を放棄するということは、信頼を失うことで、これからの仕事が出来なくなるかもしれません。そればかりでなく殺し屋という職業の信頼を傷つけたとして、業界を追われることになるかもしれません。

そうなったら（もし殺し屋に妻や子供がいるなら）家族はどうなるでしょう…。自分の周りの人々にも影響が出るとしたら、この殺し屋の決断は重いものでしょう。「情」だけをとってもいいのでしょうか。

似たような問題として、「列車の進行方向の線路上に、5 人の罪人と 1 人の一般人が縛られています。あなたの選択によって、罪の無い人 1 人か罪人 5 人かどちらか一方だけが救われます。どちらを選びますか？」みたいな問題もあると思います。

列車の問題も殺し屋の問題も、人によっては違う選択になるし、それぞれの価値観を反映するものになると思います。「必ずこれが正解」というものは存在しない問題かと思います。

鶴川さんへ：

「受けた恩を返せないから恩人を殺してしまおう」というのは、一般人としては非常に極端な話になりますが…例えば皇帝レベルの話になったら如何でしょうか？

例えばよく言われることですが、中国明朝の朱元璋は、皇帝になった途端、ついてきた家来たちをことごとく排除しました。「朱は残虐だ」という説もありますが、武将や文官の力関係や、朱一族の将来を考えるとそうせざるを得なかったのでしょう。その理由を語るだけでかなり時間がかかりそうなので、これはまた別の機会に譲りましょう。同じく、漢の韓信の物語で知られる「兔死狗烹」（狡兎死して走狗煮らる）と言う四字成語もあります。

日本の歴史においては、平清盛の法皇への叛逆、松永久秀（弾正）の主家への裏切りなどがあり、一番有名なのは本能寺の変の主人公である明智光秀でしょう。それぞれ理由があるでしょうが、今の人から見て不可解な選択をしたものだと思えますね。

今回の物語は、多少極端な話でしたが、これも当時王朝が衰亡へ向かう中、表面上は繁栄に見えても裏では不穏な雰囲気が漂っていたせいでしょうか。

現代社会においては、こんなことは考えられません。これもまた、平穏、進歩、活気のある社会がいかに重要であるかということを示していると思います。　（顧傑）

### ◇満柏画伯の漢訳俳句◇

満伯画伯の俳句、第２回も芭蕉の句、「奥の細道」、奥州平泉での一句です。

～～～～～～～～～～～

夏草や兵どもが夢の跡　　（芭蕉）

**夏日草青若伏兵**
**往事尽消梦有痕**

～～～～～～～～～～～

中国の四字熟語に「草木皆兵」というのがあります。芭蕉さんは平泉の城跡に立ち、生い茂る草々を昔の武士に見たてたのでしょう。

夢の跡は、ありでもなしでもいいので、ここは韻律を重視して「伏」の２声（平音）に対して３声（仄音）の「有」を配しました。また、有は消の反対語なので、意味深く感じられると思います。

## 【わんりぃの催し】

皆様のご参加を歓迎します

### ♫ ボイス･トレで日本語の歌を歌おう！

身体の力を抜いて気持ちよく発声しよう！
声は健康のバロメーター！！
＊動きやすい服装でご参加ください。

● **会場**：まちだ中央公民館
● **日時**：7 月 27 日（火）10：00～11：30
調理実習室
8 月 24 日（火）10：00～11：30
美術工芸室
● **講師**：Emme［エメ］（歌手）
● **会費**：1,500 円（講師謝礼・会場費）
● **定員**：15 名（原則として）
● **申込**： ☎042-735-7187（鈴木）

～～～～～～～～～

### ❀❀ 中国語で読む 漢詩の会 ❀❀

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！
録音機をお持ちの方はご持参ください。

● **会場**：まちだ中央公民館
● **日時**： 7 月 25 日（日）10:00～11：30
学習室 3・4
8 月 29 日（日）10：00＝11：30
視聴覚室
● **講師**：植田渥雄先生
桜美林大学名誉教授
現桜美林大学孔子学院講師
● **会費**：1,500 円（会場費・講師謝礼）
● **定員**：20 名（原則として）
● **申込**：☎090-1425-0472（寺西）
Email:ukiuki65jpjp@yahoo.co.jp
（有為楠）

■ **7 月・8 月定例会　　代表宅**
▼ 7 月　8 日(木) 13:30～
▼ 8 月　8 日(日) 13:30～

■ **‘わんりぃ’発送　　三輪センター**
▼ 8 月は休刊
▼ 9 月号の発送
8 月 31 日（火）10：00～

## ☆ 編集後記 ☆

鬱陶しい梅雨時に、心が浮き立つようなニュースが届きました。本誌 18 ページでご紹介している、大類善啓氏の『エスペラント』の出版です。

大類氏がご紹介くださっているように、このご本の種はわんりぃで芽吹きました。僭越ですが、わんりぃはこのご本の揺り籠です。

長らく日中関係に携わるジャーナリストとしてご活躍の大類氏が、わんりぃのために執筆の労を執ってくださったのもご縁ですが、世界中で様々な対立が顕著なこの時代に、平和の申し子ともいえる「エスペラント」のご本が世に出るのにも強い因縁を感じます。

ひとりでも多くの方に読んでいただくために、図書館に、この本の購入をリクエストしませんか。早く確実に図書館に備えられ、平和について考えるきっかけになってくれるでしょうから。

～・～・～・～・～・～

‘わんりぃ’は、新入会をいつでも歓迎します
年会費：1800 円、入会金なし
郵便局振替口座:00180-5-134011 わんりぃ
10 月以降の入会は、当年度会費 1000 円。
■問合せ：044-986-4195（寺西）

## ‘わんりぃ’265 号の主な目次


寺子屋･四字成語(44) 刻舟求剣……2
「日译诗词」(14)『敦煌曲子詞』詞の始まり……3
「漢詩の会」だより（49）李白『春思』……4
中国の歴史を彩る美人百花（９）薛涛……7
「中原」雑感（14)『中原経済区計画』を読む…9
中国の面白い神話伝奇物語（7）……12
秦皇島をご存知ですか（6）……14
中国・少数民族の民話（2）……16
本誌連載原稿が一冊の本に！……18
みんなの広場……19
‘わんりぃ’の催し・お知らせ……20